



臺中酒談
卷



79
661





凡ての事 天平十七年九月平城の中宮^宮治六百人
 大般若とよほしむるとあり年毎に行はるゝ貞觀年
 中よりとらん唯惠上人の遺言相院の御前より一時世
 をるゝと後れより唯惠録と考ね入るを千光四所
 入る御前の時茶の美と唯惠よたらしり御梅尾は極
 きりりりありせりふ光の録も又同じ述べて御前の
 後茶の美と落本國を福守と國背振山は載^植
 けりし福守を日中^福判の始り千光の茶
 けりし御道念ふおわく^福初御^初よ告く^初創造りぬ
 後多御前と美しき^初枝葉^初宿初^初宿^初宿^初の歌字
 宿^初宿^初とを多り今よむく山川の面よ何さなや
 宿^初宿^初も^初背振山^初も今^初茶園多くわくを^初院

府合やうい等とくべえれ千光明惠の派中見中茶
 と載^初始りし事^初後人の^初發^初説^初は^初滿^初舎^初と^初さ
 とる由明惠千光とつも茶を好むく小茶と載^初載^初
 功徳と何け製法と何し人よ教へらるゝ書せよ
 傳れし時多く茶と茶院とるゝ如^初千光^初實^初朝^初
 乃^初彌^初凡^初と^初茶^初と^初治^初され^初其^初四^初光^初唯^初ト^初也^初也^初
 其の時茶の始り世人のあやま傳ふるはむく
 日中^初け^初け^初け^初け^初茶も^初唯^初せ^初其^初れ^初
 其の^初か^初一^初城^初品^初定^初法^初園^初も^初た^初く^初自^初院^初の^初せ^初け^初
 一と^初普^初光^初院^初慈^初惠^初院^初の時^初と^初傳^初も^初其^初他^初の^初か^初り^初な^初れ^初
 案し大よむと^初七^初種^初の^初名^初園^初と^初か^初て^初案^初く^初お^初よ
 及ぶし^初車^初中^初い^初か^初り^初れ^初し^初傳^初る^初後^初代^初

の大樹もまたくく菜味をきくくすは流ひりれに千知教を
くくくく千靈苗年くくくくくくくくくくくく

菜式大條

普光院普光院入所時風流甚麗小異一也あり古き方字始
始字慶肩在故あり
慶の字改啓
同春ハ波有同山ハ体和也南方と云ハ一体乃号せしき一列
号也字始ハ波有の副也
利休の所云山古方と云あり信及ハ右也
列也菜をわくし一列ハ故人語して宗信とあり
○集字慶八

書院普光の作月利休居士よりむるとお傳はるに

能阿弥 — 空海 — 菴道陳

利休宗昂 — 南坊宗啓

珠光 — 宗陳 — 宗悟 — 紹鷗

能阿弥珠光の二流傳へし事よくまて利休一及し
利休は名千宗信道陳のつがはし紹鷗
一乃宗信くくくせし用ひしと云道陳の川合
く宗信を紹のつがはしと云のまれし也此を保
紹と陳と茶なしと云くくくくくく

南坊宗啓、始字宗昂、是慶故、抄初堀南宗寺塔頭集雲

の大鞠もまたしく菜味をきくし中七流のりれ二千製を
くしく千靈苗年くく二秘事也

菜式大染

善光院慈照院乃由時風流花簾と昔し江定法物
其味経青車果名酒とあつち金反玉掛とよとおわち
露遇の近臣同明の阿孫ホサあくの風流を寄るし神板
遠棚出札河巻厨子足櫃とあつちととろあひの粉成
ゆしつなきふこはるし善子の視維と定ち指式とここと
天にともるし地よわしと事也と善きいふをるすま
書院善子の作月利休屋出よむとにおつたのに

● 能阿弥

—— 空海

—— 菴道陳

利休宗昂

南坊宗啓

● 珠光

宗陳

宗悟

紹鵬

能阿弥珠光の二流傳し一書をくよきて利休一及し
一利休は名千と口命道陳のつちがし紹鵬
一阿乃宗通さうせし用ひらうと道陳の川合
く口命を始のつちがゆづきたのまれし也口保
珍と陳と茶なうしひつさうゆ

● 南坊宗啓

始宗寺を所敵
南坊宗啓

坊初堰南宗寺塔頭集雲

唐に傳傳也集雲の宗基は改稱天竺一休和尙之南坊と
ふも一休の号せられ一別号也宗基は法親の嗣也

利休の時言山南方と云者何の張右右也之是別人之茶と
嗜し右人あや西寺して宗基と云く

○集雲庵今在^七南宗寺内とあり堺の市中ノ其大のとき
南宗寺集雲庵と小庵と一今の集雲は江庵和尙
再興せし宗基利休弟造の言也利休ととよし
福法^寺系しとて唐地の法と不舎し福林法親と因て
諸事をもはれとるに句傳りれどもこの宗基をつか
ては^人清観ととく一志味と喫著し弟造因
外すしと語せし故よこの唐よおわく之院考も唐地
草庵にも不殘お考と云一休の述書小も秋子孫茶好む

者何しと語導寺と云ふれとやなれしはよの茶人也

利休家傳ノ系如凡

不審庵 拙荃斎 つけ七休ノ
唐号茶号

利休字易
江庵宗淳
眼翁道安

吐し 字旦

閑翁字拙

一公好字守

江界宗凡

仙叟宗室

文叔宗守 其伯宗守

良休宗凡 系叟宗凡 天竺宗凡

常叟 宗基 泰叟宗基 叟宗乾宗室

後家宗ト云

少房の養子たるは痛しと利休切後の後蒲生氏師
にあづかれば今津小作も氏師の体の中りりなり
海に流るるも中たしく河川かきとるを

秀忠公は沖時少房に在りて帝代音名初と云れも病身
年一の東行奉勅志し由をさす事あり思ひ事終り
弟地と稱し退休せし道其体の字も也四字宗徳嗣
あり宗守宗元宗室お終り宗のし宗徳は江尻
むすろ方の孫也今この良徳甥之氏轉しまれり
宗室も長考ししと左派十年ましく在りしとの
宗母の室もや故に宗徳的こくししと嗣承れり
宗徳孫と白珠光の志れ左派と云てましく小枝等の
宗形造後天井も子儀の白張と一石座に古宗派
在り

かき長板手板おしと兼とたてらるる後一尺二寸の好義
平松とふ巻とつけ及弟養子とかなと志兼と銀鶴こ
の右親とふ巻と遠く市果一張牙と碁小本指子
と竹としと世人珠光の志の左派と對して銀鶴の巻
と之に右圖師、臨はけりてましく也袋棚と用釣巻
と深しとて樂しと維一方丈室其室内唯眞一併休
とふ維一方丈室のおししとましく也後年孫の
らとふるもあましくと院と草菴の石のよめしと
け造風あり書院深の間も各各意味ましくと中緒
ましく御用も各柳清身と各意もましく也一就中
書院深の石の式と各各房の一樣混乱しとましく
利休宗徳のしとく記されしと故に各各房のこれた

別章と出せし

草菴茶味大深

龍井の味と利休の茶世は流行し

太田考若公の語遇他はことごとくして法旨法服ありて

一山田片ありては体これと少額辰屋を号とのと

しふ

正親町帝と特と勅と賜とて利休字易名をとし

福やとて草菴の式は強は淡しく草菴の二五を安

とけりたる強の山字二五を安とけりたる強体は草菴

法とてさるる子れお銀とてや用し用する事は安んず

凡茶と喫する事漢古よりと法旨衛盧玉川と

とて一人多くとて之も式槁或製と或磨と意或飲

ホのものとち記しとて盧今七碗仙露は通するの

福やとて丹笠子黄山君身と軽く一胃と換るとなる

とてとていさくと味とてとてとてとての固ありて

とて叢林はあつと趙初の喫茶をとてとて果法書

乃茶竈用悟遠欽山此茶店説話の類とてとてとて

録すとてあつとそれと茶之味の定今の法とてとてとて

らに福林一人とてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてと茶と説とてとて説不すこしとてとてとて

似とて佛長生とて書院嘉子の式世の茶費をの

極りてと味と及ぶとてとてとてとてとてとてとて

踏破とてとてと白鹿地と茶とおとてとてとてとて

席一把握座よこ子を蓋ふ候一 別々乾坤あるの一
様とたの〜う〜天正十九年二月大分権雅よから〜
体切候し將軍家護ホ〜
秀吉公の意と奉〜体の心おあやせられ〜
定説いさ〜体の娘若顔の員あ〜
秀吉公よ右仕〜
〜ゆ〜い〜
命よ〜の心さ〜
〜
体つ〜
〜切候と

輝世の頌小回

人生七十日圓希咄吾^ら這室剣祖佛共殺ス

程つ〜
〜

長生よ災よあ〜
世人の心〜
〜
他の美人よ心〜
〜
行脚の心〜
〜
〜
家康公古田城於正重幸と〜

秀忠公の御所範とて、ふたりの時天、下や、年、下、
思ふど、とら、く、め、あ、ら、い、し、く、ち、や、ら、あ、ら、い、し、臨、意、も
又、多、く、大、樹、を、み、ま、ら、し、御、心、を、ひ、ひ、ひ、ひ、小、座、敷、の、ま、ま、
事、を、よ、せ、上、下、た、た、の、し、り、申、し、を、あ、ら、い、し、之、を、思、ひ
ろ、と、お、あ、い、し、く、の、さ、う、あ、ら、い、し、を、あ、ら、い、し、
と、ま、な、し、け、い、中、意、と、今、一、や、く、先、の、い、ち、地、を、あ、ら、い、
伊、と、う、つ、一、つ、世、の、興、は、意、を、あ、ら、い、し、と、し、祿、と、せ、
の、時、を、乱、せ、ま、お、外、の、お、と、ひ、ま、ら、い、し、ま、お、外、の、ま、お、と、ひ、
や、と、お、あ、い、し、と、ま、な、し、し、海、を、あ、ら、い、し、し、世、の、快、楽
ま、ら、い、し、や、ら、い、し、あ、ら、い、し、あ、ら、い、し、あ、ら、い、し、
乃、真、を、好、ま、す、故、に、古、城、し、く、と、ゆ、ら、か、し、く、と、ゆ、
ま、ら、い、し、に、草、店、の、意、味、た、は、た、ぐ、ひ、あ、ら、い、し、の、要、路、を、あ、

つ、よ、あ、ら、い、し、古、城、の、後、小、座、敷、に、正、一、と、あ、ら、い、
を、今、古、城、小、座、敷、と、あ、ら、い、し、
家、光、公、の、御、所、範、と、し、祿、を、あ、ら、い、し、の、時、回、海、波、の、ま、ま、
武、門、の、威、留、古、今、一、と、あ、ら、い、し、れ、も、人、の、い、ち、ま、ら、い、
風、流、好、ま、す、小、座、敷、の、ま、ま、の、い、ち、ま、ら、い、し、
あ、ら、い、し、を、産、取、若、若、の、ま、ま、の、い、ち、ま、ら、い、し、
つ、り、あ、ら、い、し、古、城、小、座、敷、し、体、の、ほ、ろ、を、あ、ら、い、し、
あ、ら、い、し、体、の、ま、ま、と、武、門、一、と、あ、ら、い、し、兼、利、あ、ら、い、
根、を、あ、ら、い、し、た、く、ま、ら、い、し、大、樹、け、五、土、と、あ、ら、い、し、
あ、ら、い、し、あ、ら、い、し、の、い、ち、ま、ら、い、し、
諸、人、の、降、し、く、融、の、導、す、と、あ、ら、い、し、
か、し、く、あ、ら、い、し、古、老、の、お、お、威、儀、と、古、城、新、城、

と人土屋宗俊と云ふは近年御品大野道加と云ふ書
院者子系宗彦と云ふ一流と極ちをるを。其流を考へよ
体の二流下土屋と及へしは土屋古織は屬して旦夕の
業たるあり古織も土屋がすしうと云へく道加を拓く
秘旨あり老子木体なるのお徳やとありりるより
わしは走れしは体のつらうと云へくは。体の不作を
えおやをほを云へくは。及つはかの土屋を今
小しう。近年滎陽とありこれこそおとく一流を
極ち拓くとの二之輩今小しう。誠の刀童と云へく土屋能
知く常小か。又宗彦の檮屋宗玄と小遠
其意の考あり。うれえん書。曰利体凡と小遠の凡と利
を云へく。と世人の。りる。同たれと小遠。曰

利体は日本茶の湯の元祖あり後世おとく
まて茶の湯と云く人利体流の弁あり
へしはありとあり。を云へく
其利体のみやの物。て大禪作達の
墨跡。おとくは貴歎。てかくるた
他法具のおとく。おの。て。子。有
を。と。回。隅。の。相。と。う。ら。ら。福。た。を。お
意。や。碎。去。小。戸。口。お。と。る。あ。く。ひ。け。茶。の
た。お。か。き。し。は。法。道。み。た。り。利。体。に。茶
お。お。し。時。の。後。様。と。は。る。人。お。て。茶。の。系
たる。流。風。と。境。界。お。し。ん。の。ま。し。お。お。こ。を
道。に。我。と。と。ま。の。及。お。ま。お。あ。し。古。織。に

繁とまづ小身とまき 右今小意
てしと平天下は徳人上下は右小序とまき
小藤とつと福と一毎とくお交る導とれと
ふふしてゆきと中道代敷奇元の大體
とかり用ひしる戸てのるすく自己れ茶
れ湯中ら利体風とほとおとてと又
よく人ふんをとうあてと代おの指南と我の
茶の湯に別の事とすするるといふとてと
いふと思ふと人ふまかせと先と江と休
れゆとちとつと人の云るすん惚れおこと
後と道とよし記せるすのびのるすと考ると
小遠のい代とては味とよと一と道とる

分明とまづ小ありと改とた中とくはれ要
と勘毎と一自己のためと一ひとすてとと
いふと殊勝とるすく唱評法徳法道と
端ふんと用ひとまきと一歩終ふ東西とことふ
いとらや古織心をせと稱せとまきと一
かの親交の爲とと殊光れまの産交組
臨れ回とすホと司以一向の草店ふやつ
さす法具餐夜もかきと一統とつひとん
とつと事つとるすあてとまきと一とと
世間法とつと一ひ内と清浄の女意と卓位
とつと一休屋と志後世に及むと一古織小遠の
時とつと日ひ法とつと一ひとつとにせとるすとの科

いあふいとくは後代の歌をすくふは

落地大松

落地の草宿寂莫の境とまゝなる名^石なり法華
譬喻品の長者諸子の夏の大光とあり^{白落地}
とくして世間此塵勞垢染とくする神心清淨の
無二物底と云わく名つけて白落地といふれを
本来の^一地^かして中心の^か相^の樹^の天然の^一庭^也
一名^石常^理老^樹こときの住境たることされき
名中の^定地^の地形勝概ゆれゆか^く本を栽竹
をむ^らし^し細^くの^ち後^をめ^て自^ら名^に安^ん
深^くぬ^るを^のうちも^おの^つる^る苦^野う^らま^の
奥^をと^思む^のひ^れく^来る^人を^いと^いく^は花^を手^林を

一

愛^しある^を得^る名^の初^とを^らす^るその^凡
奥^にお^のる^る迷^るる^る集^るる^る菴^の落^地松
下^堂と^云ふ^門を^合せ^る用^いる^一牧^の音^板
を^うけ^らる^るを^文如^老
賓^客腰^裁に^まる^と同^道人^おお^お板^をお^て案^内
を^可に^報す

一一

手^水の^り心^取を^する^は道^の所^要と^す
菴^を出^請し^る客^菴と^入海^菴と^入て^茶
飯^の諸^奥不^偶并^味も^又子^菴と^入て^茶
の^趣を^つを^ひる^る客^菴と^入て^茶
佛^湯松^風と^及び^清声^到ら^る客^再再^来湯
お^おお^の名^をを^らる^事多^罪と^す

一

- 一 菴門菴外に於て世事の執^能話古來禁以之ヲ
- 一 賓之歴然の會巧言令色を入るが如し
- 一 會始終二時を過るるを以て但法話法談たり

天正十二年九月上

南坊左判

右七条の茶會の法也嗜茶輩不可忽者
 板寸法形アリ口傳
 宗易左判
 此の化つて以てわくのこころ毎^赤糸川^赤とあり
 悠然とく大適に蹈^赤著也(色)とあり
 二條の深切茶よりかか^赤子^赤載のわ^赤こ^赤也

詠うあまはばくまきとん^赤子^赤愛^赤万^赤化^赤こと^赤か^赤の^赤
 七条ふすべ切多り^赤縁^赤中^赤休^赤居^赤士^赤の^赤詠^赤り
 高^赤化^赤の^赤多^赤浮^赤世^赤の^赤あり^赤の^赤道^赤あり^赤
 一のちりやなとちふしり

草菴大梁

釋氏要説に曰草とては^赤座^赤を^赤ち^赤り^赤し^赤れ^赤と^赤菴^赤
 いを縁と曰去院^赤基^赤子の^赤式^赤世^赤間^赤法^赤の^赤多^赤く^赤を^赤
 文字のまゝのこころ^赤規^赤矩^赤の^赤こ^赤ころ^赤の^赤一^赤端^赤の^赤高^赤化^赤
 弟^赤の^赤出^赤世^赤の^赤法^赤の^赤た^赤と^赤ん^赤の^赤文^赤字^赤の^赤草^赤の^赤ま^赤じ^赤
 自^赤中^赤王^赤の^赤如^赤也^赤と^赤ん^赤の^赤能^赤の^赤白^赤心^赤淨^赤則^赤玉^赤土^赤
 淨又大梁の市朝よりくふるより城邑山谷

其地と云ふは、
らんがし、
といべし、
世の衣、
の宿となり、
休のあり、

後地教奇を客もあは、
ゆりかき、

凡教奇を数奇道、
遠く、
遠く、
遠く、

取虚回作事、
く出、
零餘と奇と云、
さる、
やして世に偶、
多と、
数奇者と、
道方、
な、
して、
補い、
子、

称して作用者相配合し及び奇あり偶ある
るも奇偶斗又奇偶同奇も亦偶合亦奇環
物無指のまといとて筆舌と号する小及び大
好車の字は流のすうなるとりて車と
好するれと亦此車名のさふと久しかり
世間のすきしやみか物まきしや物すき也
物まき道因り成もゆりてこれと亦湯と
りてりりいふ教奇の二字世塵小埋役
して百有餘年

器物大略

天地は圓いありの皆形意也大小を総たの

天意ありのれかりて用ふるは形なり
とばると神といひ理といふ妙といひの
と比しれながらあるかきことしては乃
りのこれいひ理といはれを差別是小
意といふ意といふてすれを理別れ無
まうく心おわ陰陽動靜を理辨用はる
一え一え又二四ありとあるを一意と奇と
力一の大意ありと上も上下陰陽日月晝夜の
奇ありと数奇の教奇ありと多なるはな
人といふ意おわ情教と生ひるははむき
るといふことあり一單一軌のさる事とを
身の不の福ひとなるとるはひ少欲知の

中意と云ふはむづかしく切れたを二と利
 二つが二つと云ふは他を他の利と云ふ
 うしやうたたりくあやうきことなり
 てゆへるの目かきいひる道員の新古
 價の輕重と臨する自利者高宗者の流し
 宗の一人目かの橋也宗玄ある時こそ同
 回世人の称しやい利体のことと小遠の見
 物もいし道員に見る人のすきい
 有る小遠のいこととつけあはして諸
 おくられたる道員いことと云ふその人

されと見るは物か人の人もあはれり好む
 西意うれは体より物なきありことぞ
 称しやもいししれを小遠うかひき
 う云くせん不先うしは利のは合われこれ
 道と云ふ人の次利体種一而あり
 と云ふはさうけのありあはれは宗と出
 或は名とつけあはれし其時代のい
 今こそ世に賞候ありしは体の宗の
 大徳ありて道員の新古輕重ありしは
 他やこれなりてやうれ實の名物あり
 利と云ふ自己の道員より宗と出を而
 とおのづから白せいし人の好む

支物あり堂殿し一動もたぐいあやののたる
小石木の繁くものこの道真とてつくして
くれしとあるふらとぞおのゆのふも
まらしいあく誰こつ目まといふいとね松を
を詮議しておられしこれ諸人の機軸と
うさひいばくらくひさる言も茶のおむきと
あがし由してや体のさ風ふくこふふ
天地懸隔ちしき事さかると言られし
橋をがええとあり小遠のこつ津橋
ありをの勅命なり

交會大條

賓と主と對しては賓と對しては人相
我相のよめお役せしむる流儀のな意と
うしあふゆふ事とししふふこりま
さるところしし賓おとおと浪
本道と白の流儀の賓之歴然れ念
深ふ回客亭とありしれ心くあふ
とよしかたひるあふあしと云く体
れ令言毎くわひれまとし体の細ふ
春もあやるるなとてし
茶れ中意とあやるる又他事ある
つらひ深ふ自有人利体ふ茶れ秘る
とゆふれさういと同体言茶いふ

れよまきやふたしく炭に湯れしく根小を
花とそその花れやふつけさぞて夜に涼しく
やいあやあふするは中秘る子ほしとこそ
らる同人ふ真しくそま(とそま)も合
とれ前やそい(とそ)ふ体云う会忘のおるそ
とこそして尺の杖つ中子ふる(とそ)と云
甲(とそ)所ふ(とそ)山欽和尚居ぬひく(とそ)体のそ
主物やりの(とそ)案の白居易ふ(とそ)と(とそ)諸悪英作
最善奉(とそ)い(とそ)れ(とそ)た(とそ)い(とそ)の(とそ)童(とそ)も(とそ)れ
と(とそ)知(とそ)て(とそ)八十(とそ)の(とそ)年(とそ)も(とそ)行(とそ)ふ(とそ)事(とそ)あ(とそ)ら(とそ)ふ(とそ)ら(とそ)ふ(とそ)と(とそ)
後(とそ)扱(とそ)あ(とそ)ら(とそ)し(とそ)う(とそ)も(とそ)同人(とそ)感(とそ)依(とそ)も(とそ)と(とそ)き(とそ)し(とそ)又(とそ)白(とそ)紙(とそ)踏(とそ)
利(とそ)休(とそ)の(とそ)糸(とそ)の(とそ)意(とそ)味(とそ)も(とそ)

定家卿

つんわりせし花と紅葉もなすらふらふ
浦のときを乃あふれゆくれ

家隆卿

花とのいゆらん(とそ)心(とそ)里(とそ)れ

あ(とそ)い(とそ)の(とそ)ま(とそ)の(とそ)体(とそ)と(とそ)ん(とそ)や

と(とそ)ん(とそ)世(とそ)の(とそ)音(とそ)ふ(とそ)か(とそ)あ(とそ)ら(とそ)と(とそ)て(とそ)常(とそ)に(とそ)眠(とそ)れ
し(とそ)と(とそ)や

宗隆の詠

あ(とそ)知(とそ)ま(とそ)ら(とそ)ゆ(とそ)を(とそ)し(とそ)奇(とそ)し(とそ)か(とそ)ら(とそ)れ
た(とそ)見(とそ)し(とそ)せ(とそ)る(とそ)家(とそ)隆(とそ)の(とそ)夕(とそ)ら(とそ)れ

書録ふゆ大際

世に宗のやる茶書に利体のまじりしものまじり
ありし千氏れゆふおのつゆい守考より
はこむく体書多し体の名をとりて極は
ゆるなりし体の門方ありし人も人々居され
茶話のこころと心見記し家あり
恥しとるふ又有とくも根なきことし松系
の風聲とほいありし筆者のあやゆり馬
平馬とならうて心法の傳れりまあり又宗旦
凡と称する流ありて孫又体長生の清風あり
ぐる事相交れりといふことありといふ

体の的強をまじりて使て流の二奇一不
まかやて格式の古規ありとゆいまあり流
統せし自然の規程と二ふり舎
草菴の一新格あり地位と得て誠
たぐ湯とこし茶とたぐと云一境
縮著やしをまよふもの同ものふし二と
とめて毒細とありて月打破れ一凡ふ
れと一とをありしものありと云
義理合れ真ふおいてと解の度
れ人なく奇快れ不作の天の流
どのよりすく見たりて本意ふあり
あつた白くありしものも合海の

出子(凡法道法法の後世も正しく
了らるゝと見たりふ成行ことと見らるふ
只根本傳束れ正と云ふ的におも
面授の親切なく事(孫文茶の
二味の一法も漢和古今傳の事も
あふ(銀路利休法味と泉源とを
録するといふ体)又十の系末能後
悔をくちりふ(ややく七千は階終
まては(る事)理無礙れ境不入(と
み)川か(り)て(云)り(と)る(ん)体(も)い(道
と)正(しく)傳(く)ま(は)し(く)思(ひ)て(出
編草葉)も(も)る(う)を(出)來(し)たり

は(は)ふ(か)の(横)難(の)時(威)後(教)礼(せん)事(と
さ)う(し)る(や)く(曉)命(せ)と(道)一(と)ん(と)書
千(家)の(こ)ろ(い)お(む)て(か)る(む)て
然(も)も(外)の(茶)虫(并)少(店)の(授)一
多(年)指(南)の(精)蜜(と)千(家)の(傳)束(れ)不
及(り)ん(定)不(能)て(也)一(見)お(も)一(と)書
院(基)子(と)虫(と)い(は)し(て)傳(く)し(て)傳(く)
事(や)年(く)を(秘)地(草)菴(と)と(い)は(し)
て(傳)く(し)る(事)か(し)虫(と)い(は)し(て)
二(す)は(道)の(出)所(ふ)と(も)つ(て)出(る)也(と)
ん(所)虫(を)見(し)事(理)一(及)内(外)同(等)也
た(く)究(め)の(法)と(も)き(こ)ら(め)の(法)と(も)の(法)子

者の志は清きと深きとふよるを甲
あるは小流の口すきあるは川
海と云ふと海をみるるは

百年荊棘安山テ露地耐寒衣裳

燧火紅丁點 井華洗鉄鑪

あゝんん之道一あ甲
むすひまをくくくくなれ菴と
白雲の

曾聞這一冊壺中一枕揮之主草名居士
一夕引松處士乞錐士之二客交接之
爐談也

柴場松月庵實山写し

讀草名居士壺中爐談

草菴露地淨無塵

一味松風主對賓

物外交情淡中趣

知心獨許捧灯神

万山老納書印

寶山自筆本堂校合云亦遠光

道柱

以心為本... 道柱

